

柴田哲雄著

習近平の政治思想形成

〔彩流社、二〇一六年三月、一九二頁〕

習近平が、胡錦濤を継いで中国共産党主席となつてはや五年、国家主席としては四年の歳月が経つた。就任当初、同じく「紅二代」の薄熙来を蹴落とし、就任してからは周永康ら胡錦濤時代からの高官を「反腐敗」のかけ声で投獄するなど、激しい権力抗争を勝ち抜いてきた。そして、個人への権力集中ぶりや強権ぶりから、毛沢東との類似性を指摘する向きもある。

こうした習近平と彼の率いる党中央が現在の中国の党と国家にどう作用しているのか、すでに何冊もの書物が編まれている。相も変わらぬ「党国体制」を取り、民主化には背を向けつつ世界第二位の経済規模に成長した中国は、何であれ今後の世界に大きな影響を与え続けることは確実であろう。また、隣接する日本にとっては、大いに

途惑い、「力による現状変更」を迫る勢力と眼に入るからである。

本書は、これまでに汪兆銘政権研究などで知られる著者が、習近平とその政権についての論考を『中国研究月報』などに発表してきた研究の成果である。現状分析に止まらず、歴史学の方法論を援用し、「紅二代」の代表的な政治家習近平とその思想を検討している。書物としては一般書、あるいは啓蒙書であり、習政権に軸足を置いた現代中国政治史のガイドブックといえる。

著者の言では、「安倍晋三と酷似し、毛沢東の影響を強く受ける習近平」ということになる。革命の元勳ながら、民主化に一定の理解を見せ、文革期に迫害を受けた習仲勲を父とする「紅二代」の習近平に対し、安倍晋太郎を父に、岸信介を祖父に持つ安倍晋三は、ともに父との触れ合いが少なかつたこと、そしてともに父の政治信条とは縁の薄いことなどを共通点としてあげている。習近平自身について言えば、最高権力者という現在の強権的なイメージ

ばかりが先行するが、これを強権を用いて改革を進めるとすると、矛盾はしなくなる。毛沢東と鄧小平との比較から考えても、文革で苦難を味わつた故に、反文革的な姿勢を取ると見られていたこともあつたが、毛やその政治手法については幼い頃からの刷り込みで思考方法が構築されていたとすれば、さほどの違和感はない。毛が「独立自主」「自力更生」を、鄧が「対外開放」を軸にしても、いずれも社会主義建設が目的である。置かれた外部環境が異なる故に、違いが表れたとする。両者に本質的な相違がないとの認識である。こうしたことから、習体制は下からの民主化を徹底的に抑圧した上で、上からの政治改革を進めて「依法治国」の実現を図ろうとしている、と述べる。本書には、さらに著者による対中関係への提言なども収められている。

本書は、中華人民共和国を単なる伝統中国の復活とは見ずに、中国史を「不易流行」の視点から見ようとすると、参考となる書物である。(三好章)